



国際委員会だより

【第15回】

Message from International committee

実践的海外プロジェクト②

～国内業務と比較した海外業務の魅力～

国際委員会

渡邊 眞道 | WATANABE Masamichi

建設コンサルタンツ協会の「海外市場対応能力の支援」の一環として、国際委員会から海外業務を紹介する記事を継続して掲載しています。今回は、「国内技術者が海外事業に携わり感じたこと」をテーマに、国内業務と海外業務の違いや海外業務の魅力について、現場で活躍しているコンサルタントの声をお届けする全4回シリーズの第2回です。

インタビュー対象者プロフィール

対象者：水井一成(Kazushige MIZUI) (38歳)
所属：パシフィックコンサルタンツ(株) 国際事業本部
専門分野：都市・地方計画
事業ステージ：計画・調査
経験年数：国内2年、海外8年
海外業務実施国：イラン、アフガニスタン、インド、ケニア、コロンビア、メキシコ、その他東南アジア諸国



写真1 乾季に干上がった河川に水汲みに来たケニアの青年と

インタビュー内容

水井さんは、社会人1年目から海外業務に3年間従事した後、国内部門に異動し、国内業務の傍らで海外の調査業務も行ってきました。現在は、海外業務専門の部署で主に調査業務に従事しています。

技術分野も、海外業務では地震防災、戦後復興、地球温暖化対策、上水道、国内業務では道路交通情報システム、地域活性化と、多分野で携わってきたことから、これまでの経験を通じた海外業務の捉え方について尋ねてみました。

- Q1. 海外業務をやりたいと思ったきっかけは何ですか？
- A1. 海外留学を終えて帰国後に就職活動を始めたのですが、その際に海外業務を志向していたわけではありませんでした。多少英語が使えるということで、たまたま入社した先が海外業務を行っていた、という順序でした。ただし、仕事を始めて直ぐ、海外業務の魅力に惹かれました。その魅力が、現在の海外業務への取組み意欲の源泉です。
- Q2. 国内業務と比較の上でのその魅力とは？
- A2. エンドユーザーの顔が、どちらかと言えば国内業務よりも見えやすいので、やりがいを感じられることだと思います。これまで私が携わってきたのは、海外業務とはいえ国内省庁発注の仕事なので、クライアントは国内業務と変わりありません。ただ、調査業務の場合は、相手国の政府関係者から住民までを対象に、とにかく現地ニーズを突き詰めることから始まりますが、途上国の場合は特に、その現地ニーズがベーシック・ヒューマン・ニーズ(BHN)に直結するものな

ので、エンドユーザーのために自分が頑張らねばという気概が自然と沸いてきます。そこが魅力です。

- Q3. しかし、国内業務でも、例えば震災復興関連業務など、エンドユーザーの顔を思い浮かべながら気概を持って従事できる仕事はいくらでもありますよね。
- A3. 確かにそのとおりです。ただし、海外業務の現地カウンターパートの方々は、私に対して、多少大袈裟に言えば「君ではなく、君の会社でもなく、日本の技術が、我々のために何をしてくれるのか」という姿勢で対応してきます。そのため、国内業務と比較してより大きな期待と責任を背負っている、という実感があります。
- もう一つ、国内業務との比較の上で実感するのは、仕事のスケール感が大きいことですね。それは業務の規模という意味ではなく、対象課題の範囲という意味合いです。つまり、海外業務の場合は、よりBHNに直結する公益的サービスの課題を対象にした仕事が多いです。したがって、課題の要因をつきとめて最適解を提供する、というコンサルタントの基本的な使命、行為を、より体感できると思います。
- Q4. 海外業務に従事する際のポイントは何ですか？
- A4. やはりコミュニケーション力ですね。どの国でも政府関係者とは基本的に英語で協議しますが、いろんな国を訪れるほど、技術に国境は無いけれども、コミュニケーションの壁は高いことを実感します。語学力だけでなく、その国の文化的背景などへの理解力も、コミュニケーションスキルの一つとして大事なことがわかりました。例えばインド人はよく自己主張が強いと言われますが、その他にも、特に政府関係者は、理論や新規技術に対する探究心が強いという側面があります。こういった点を踏まえて、理解してもらいたい日本の技術を一方的に主張せず、類似技術との比較論を織り交ぜながら技術を丁寧に説明したり、インドにとって新しい取組みになるとアピールすることに気を配ったりしています。
- Q5. 一旦国内業務に従事してから再び海外業務に携わるようになったことで、改めて気付いたことは何ですか？
- A5. 私の場合は、国も技術分野も様々に経験してき



写真2 ゴミが散乱する高架水槽敷地(インドの配水場)

ましたが、一番重要なのは日本の経験や技術への理解だと気付かされました。どんな国でも、業務でも、そこが拠り所になります。もちろん、深く広い理解が理想的ですが、それには時間がかかります。ですので、若い方には是非若いうちから、粹にはまらずに自身の技術や経験の領域を広げていって欲しいです。海外業務は、その格好のフィールドだと思います。

- Q6. 水井さんもまだ若手の世代ではないんですか？
- A6. いえ、35歳を過ぎ、最近では、渡り鳥のような仕事の仕方ではなく、腰を据えてその国の課題に対峙していきたいと思うようになりました。

まとめ

海外業務に限らず、仕事面での肌感覚というのは非常に役立ちますが、これは経験によって培われていくものです。様々な経験が得られる機会が多い海外業務は、そういった技術者としての肌感覚も磨かれていくという点でも、魅力的なフィールドではないでしょうか。読者の皆さんも、自ら機会を作っていくような行動を起こして、海外業務に積極的に関わって欲しいと思います。水井さんの国内業務を含めた技術的経験の蓄積が、海外業務でも重要という指摘は、若い皆さんの背中を押してくれるのではないのでしょうか？